

# 池袋の戦後史をめぐる〈場〉とにぎわいの創出

——「池袋Ⅱ自由文化都市プロジェクト」にみる大学の地域連携の道筋

後 藤 隆 基

## はじめに

戦後日本が復興を遂げる一つの起点となった「ヤミ市」（闇市）と呼ばれるマーケット。その混沌から生まれた多義的な生活文化を肯定的に検証し、戦後七十年と池袋の地域史を考える「池袋Ⅱ自由文化都市プロジェクト」が二〇一五年に発足した。豊島区、東京芸術劇場（公益財団法人東京歴史文化財団）、立教大学の三者が主催者として実行委員会を組織したこのプロジェクトは、全体を貫く総合タートルを「戦後池袋——ヤミ市から自由文化都市へ」と称し、大きく四つの柱からなる。

第一に、シンポジウム「戦後池袋の検証——ヤミ市から

自由文化都市へ」（九月十二日、立教大学）の開催である。川本三郎氏、マイク・モラスキー氏、吉見俊哉氏を講師に招き、池袋とヤミ市について多角的な議論を深めた。

第二に、戦後池袋とヤミ市をテーマとする展示である。東京芸術劇場ギャラリー1・2での展示（九月十四〜二十日）を中心に、豊島区立郷土資料館、立教学院展示館、自由学園明日館、旧江戸川乱歩邸、ミステリー文学資料館で関連展示を開催し、池袋西口の各館をめぐる回遊型のプログラムをめざした。

第三に、池袋西口公園で行われたイベント（九月十八〜二十日）である。戦後の雰囲気や復興に向かう大衆の活力を表現し、外縁から池袋の戦後史を考えるための〈場〉と

にぎわいの創出を試みた。

第四に、新文芸坐と池袋演芸場との連携事業である。映画、落語を通して戦後日本の諸相を読み解こうという企画であった。

いずれも戦後七十年の節目にくわえて、池袋に長く住んでいた江戸川乱歩の没後五十年を期すものであり、二〇一五年という現在につながる過去（歴史）を直視し、池袋の未来を見据えるための契機とすることを企図していた。

本稿では「池袋Ⅱ自由文化都市プロジェクト」（以下、本プロジェクト）における第三の柱——池袋西口公園でのイベント（以下、本イベント）の実践を視座として、立教大学の地域連携の道筋について報告する。

## 一 池袋西口公園という〈場〉

まずは、本イベントの舞台となった池袋西口公園という〈場〉について確認しておこう。

かつて池袋駅西口には、豊島師範学校（一九〇九年。一九一一年に附属小学校も設置）や成蹊実務学校（一九二二年）がつくられ、築地から移転してきた立教大学（一九一八年）や自由学園（一九二一年）などとともに文教都市の空気を醸成していた。しかし、一九四五年四月十三日の城

北大空襲によって豊島区一帯が焦土と化し、戦後まもなく池袋駅の東西には複数のマーケットが乱立するヤミ市が形成された。

〔池袋西口に引用者注〕最も大規模なヤミ市が発生したのは豊島師範学校の焼け跡で、元都議会議員をはじめ複数の主体が同地の使用許可を願い出たことがきっかけとなり、マーケットの建設が進んだ。豊島師範学校の土地は一九四八年三月末までという使用期限つきで借地されることとなったが、期限が来てもマーケットは立ち退くことはなかった。その後、六二年末までにヤミ市は整理された。（石樽督和「食料品・飲屋を中心に、東口・西口駅前に広がる」『東京人』第三五八号、二〇一五年九月、二六頁）

東口のヤミ市は区画整理によって一九五二年末までに解体されたが、西口では一九六二年末まで存続していた。一九七〇年、豊島師範学校跡地に池袋西口公園が開園したものの、ヤミ市の時代を引きずるような雰囲気は長く残っていたという。そこで一九九〇年の東京芸術劇場開館にともなつて劇場と一体的に公園も再整備された。

しかし、池袋西口公園は、石田衣良の小説「池袋ウエストゲートパーク」（一九九七年）。二〇〇〇年に宮藤官九郎

脚本でドラマ化)で良くも悪くも有名になり、また「ナンパ広場」などと呼ばれて若者のたまり場となる。そうした負のイメージを払拭すべく、豊島区制施行七十周年にあたる二〇〇二年、地元の商工団体や住民有志からなる「元氣な豊島をつくる会」が寄付を募って野外ステージを併設した(二〇〇四年には開閉式ルーフを設置)。すでに池袋ではさまざまなイベントが催されていたが、従来にも増して、このステージと広場を活用した多種多様なイベントがほぼ毎月、週末になると行われ、定着していく。駅前という好立地も相俟ってそれらのイベント群が池袋西口の活性化と地域連携の一つの核として機能してきたことは言を俟たない<sup>1)</sup>。

本イベントにおいても、池袋西口公園という〈場〉に蓄積されたノウハウやネットワークが強固な基盤となり、豊島区観光協会(齊木勝好会長)、池袋西口商店街連合会(谷口政隆会長)、NPO法人ゼファア池袋まちづくり(石森宏理事長)、NPO法人としまNPO推進協議会(柳田好史代表理事)など地元の諸団体、企業、商店街、町会等の理解と協力によって、構想・準備段階から開催までを完遂できたのである。

その背景の一つとして、豊島立教会を中心とする立教大

学校友会の人的ネットワークがあった。池袋界限には、立教大学の卒業生が数多く居住し、また商店や事業を営んでいる。その中から、齊木勝好氏を筆頭に地域をつなぐ鍵となる人びとが本プロジェクトの実行委員会に名を連ね、警察や消防等も含めた地域との一体的な協力体制を構築しえたことは特筆すべきだろう。

また本プロジェクトが、これまで積み重ねられてきた大と地域との関係の線上にあることも付言しておこう。一九一八年の池袋移転いらい、立教大学がいかに池袋のまちと関わってきたかについては、拙稿「池袋のまちと、立教大学」(『東京人』第三一八号、二〇一二年十一月増刊)にまとめたことがあるのでご参照いただきたい。とくに、学部ごとの個々のゼミによる草の根的な地域活動が果たしてきた役割は大きい。二〇一四年からは立教大学と東京芸術劇場による連携事業「池袋学」を開講しているが、本プロジェクトは、大学と劇場を軸にしながら、地域との積極的な協働による住民参加型の地域学の可能性を模索するための実践的な試みでもあった。

かつて大規模なヤミ市が存在し、繁華街形成の活力の源泉となった空間で、ヤミ市をテーマに池袋の戦後史をめぐる本イベントを実施することは、本プロジェクト自体の意

義と必然性にも関わる重要な条件であった。つまり、本イベントは東京芸術劇場の展示の補助的な位置づけで、展示会場への人の流れをつくるべく構想されたわけだが、それだけでなく、池袋西口公園という〈場〉の歴史的背景をふまえて現在の池袋の活況を再考するという精神的支柱としての役割も担っていた、といってもいい。

以上縷述したように、本イベントは、従来からの池袋西口公園におけるイベントを通して地域連携の蓄積、池袋における立教大学の校友ネットワーク、立教大学と地域との関わり、そしてヤマ市という土地の記憶に向きあう歴史的意義といった複数の前提の上に成立していたのである。

## 二 構想から実現まで

本プロジェクトは、渡辺憲司実行委員長（立教大学名誉教授、自由学園最髙学部長）のもとで事務局を立教大学が担い、同大学総長室教学連携課（当時）の近藤泰樹主幹が事務局長として全体を統括した。構想当初から前述の展示とイベントという二本柱は決まっており、二つのチーム（展示チーム主幹・石川巧立教大学文学部教授／イベントチーム主幹・飯島匡夫立教学院理事）に分かれてそれぞれ運営を行った（シンポジウムは石川教授と近藤主幹が、新

文芸坐と池袋演芸場との連携は主に渡辺実行委員長とイベントチームが折衝にあたった）。会計と広報を小林俊史氏（株式会社創発としま）が担当し、地域との緊密な連携体制を敷いた（なお、後藤はプロジェクト全体の事務局補佐とイベントチームの事務局を担った）。

以下、本節では、本イベント実現までのイベントチームの動きについて概観していく。

イベントチームは、第一回分科会を二〇一五年二月三日に行い、毎月一回程度の定例会議を通して議論を深めていった。当初は池袋西口公園内でのヤマ市の忠実な再現をめざしていた。しかし、バラックを模した店舗（テント）の装飾や会場全体の装置設営等に膨大な経費が見込まれたため、規模を縮小し、ふだん池袋西口公園で行われているイベントと同様の形態で、二十張を目安に飲食店等のテントを設営することとした（会場統括・オフィス田中）。

そんな中、立教大学の卒業生であり、渡辺実行委員長のゼミ生でもあった（！）ホッピービバレッジ株式会社の石渡美奈社長の賛同を得、特別協賛企業として同社の参画が決まった。一九四八年に東京の赤坂で生まれたホッピーはヤマ市の時代に焼酎割りとして人びとに愛され、都市の復興と生活の再建をめざす大衆を支えた飲み物である。同社

社員の名刺には、ヤミ市への思いと戦後復興に対する石渡光一会長の言葉が印刷されている。まさに戦後／ヤミ市を象徴するアイテムとして本プロジェクトの企画意図にもかなうものであり、ハード面からのヤミ市再現ではなく、ソフト面から、池袋西口公園におけるヤミ市の表象の支柱的役割をホッピーが担うこととなる。

「ヤミ市風／自由市場」池袋西口ホッピー祭り」と銘打ち、池袋西口商店街連合会やNPO法人としまNPO推進協議会、ホッピービバレッジ株式会社等の協力で、池袋界隈の商店・団体を中心に出店者を募った。また池袋のヤミ市が鉄道各社による農村地帯からの物資運搬等に支えられたことに鑑み、豊島区の友好都市——とくに埼玉県下の自治体にも豊島区観光協会を通じて参加を呼びかけた。出店者の募集、その後のテントの意匠やメニューの考案など実証的な根拠を求める上で、本プロジェクト全体の指標でもあった星野朗・松平誠「池袋「やみ市」の実態——第2次世界大戦後の戦災復興マーケット」（『応用社会学研究』第二十五号、一九八四年）から得るところが大きかったことも言い添えておく（たとえば、マッサージ店から応募があった際、星野・松平論によって池袋西口のヤミ市にマッサージ店が一軒あったことが確認された）。

池袋西口公園内の野外ステージでは、音楽によるにぎわいの演出を計画した。

ひとつは、豊島立教会前会長の重原康孝氏、池袋を中心に音楽活動を展開する有田みのる氏が中心となり、戦後を彷彿させる多ジャンルのバンドでプログラムを構成した「池袋昭和懐メロステージ」である。けっして潤沢とはいえない予算の中で、両氏のネットワークを通じて出演者の充実を図った。

もうひとつ、バンド演奏と併せて提案されたのが、カラオケ大会である。戦後まもない一九四六年一月、日本放送協会が素人参加の音楽番組として「のど自慢素人音楽会」のラジオ放送を開始した。現在も続く「NHKのど自慢」の原点である。かつて元NHK芸能局長の吉川義雄氏は「抑圧され、食糧飢餓の国民に、なにがしかの演歌調の唄が歌えることが唯一の灯となった」（『お釈迦さまでも』『悲劇喜劇』一九七五年二月）と述べていた。ここに戦後大衆文化の一つの息吹きを見いだし、歌を通じた戦後文化の表象と大衆参加というコンセプトに基づいた企画であった。

これまで池袋西口公園でカラオケ大会が実施されたことはなかったが、立教大学の校友であり、こちらも渡辺実行委員長と縁の深かった株式会社シン・コーポレーションの

加藤伸司社長、メロ・ワークス株式会社の町田佳昭社長に協力を仰ぎ、二社が特別協賛企業として加わることとなった（のちに株式会社第一興商、一般社団法人日本音楽健康協会も参画）。さらに、加藤氏と町田氏の仲介で、日本で唯一のカラオケ評論家である唯野奈津実氏に大会運営と総合プロデュースを委託。一九八八年（昭和六十三）以前に発表された「昭和歌謡」限定の素人カラオケ大会「池袋昭和歌謡のど自慢2015」として、池袋西口公園で初のカラオケ大会を実現すべく、本格的に始動したのである。

本イベントは、以上三つの柱からなるが、いずれも地域および立教大学校友の人的ネットワークが基盤となっていたことはいうまでもない。本イベントの開催予定時期が池袋西口公園での別のイベントと近接していたため、公園使用のスケジュール等について区や地元団体との意思疎通、情報共有に齟齬を来す場面もあったが、実行委員の理解と協力で解決策を導くことができた。多くの団体・機関が関わるイベント運営に大学が主体的に参画する場合、各方面との密な連携を進めることが重要である。

### 三 イベントの実施

九月十八日に幕をあげた本イベントは、時折雨に見舞わ

れたものの好天に恵まれ、三日間で約二万人（推定。通者含）の来場者を数えるほどの盛況であった。

池袋西口公園の「ヤミ市風『自由市場』池袋西口ホッピー祭り」では、飲食物や衣料品、雑貨、マッサージなどの出店者が実行委員会の本部テントを含めて十七店舗集まり（表①参照）、本部でも、立教大学第一食堂の協力によるすいとんの販売、オリジナルパッケージのサクマドロップ

豊島区観光協会	インフォメーション
えんがわ	芋煮、玉こんにゃく、串焼き
あすなる農園	無農薬野菜、米等
タイ田舎料理 クンヤー	タイ料理
ラテン大和	ブラジリアンソーセージ
Labot ホールディングス	鶏ステーキ
ホッピーピバレッジ	ホッピー、オリジナルカクテル、駄菓子等
甘美屋商店	フランクフルト、揚げ物各種等
美好屋	海鮮焼き、リンゴ飴、卵焼き
手造りおにぎり「吾ん田」	おにぎり、カレー等
三金（東松山市）	焼き鳥
みそぼと本舗（秩父市）	みそぼと
川越物産（川越市）	たこ焼き、お好み焼き、焼きそば
NPO 法人日本ファイバーリサイクル連帯協議会（JFSA）	古着
みのや堂	雑貨
い〜ずはんど	マッサージ、桑茶
実行委員会本部	すいとん

表① ヤミ市風「自由市場」

スの制作といった工夫を凝らし、売り子の学生がモンペとブラウスを身につけるなど、戦後の雰囲気表現することに努めた。

その中心的役割を担ったのが、ホッピービバレッジ株式会社のブースである。樽詰めのホッピーや本イベント仕様のオリジナルラベルのホッピー、江戸川乱歩の没後五十年記念の限定オリジナルカクテル「黄金仮面」を販売。開催期間中に石渡美奈社長のラジオ番組「看板娘ホッピーミーナ Happy Happy Bar」（ニッポン放送）の公開収録（渡辺実行委員長がゲスト出演）を行うなど、社を挙げての販売・広報によってイベント全体が力強く推進された。

野外ステージでは、九月十八・十九日の二日間にあわせて「池袋昭和懐メロステージ」が催され、歌謡曲、オールディーズ、ジャズ、カントリー、ブルースなどのバンド演奏等を行った（表②参照）。池袋西口公園では毎年、池袋ジャズフェスティバルや池袋フォーク&カントリーフェスティバルといった住民参加型の音楽祭が開催されており、それらの常連バンドなどの出演も地域との連帯感を生む大きな援けとなった。

最終日の九月二十日に終日行われた「池袋昭和歌謡のど自慢2015」には、定員八十組のところに百六十三組の

9月18日（金）
キミソラ（ブルース）
Ehko（昭和歌謡）
KHAMSHIN カムシン （オールディーズ）
9月19日（土）
You-Yu Bounce （ジャズ／ポップス）
塩谷晃とコナ・アイランダース （ハワイアン）
東京シネパラダイスオーケストラ （昭和歌謡）
高橋依歩（タップダンス）
やなかもなか（アイドル）&谷名 寛二郎（ファンク）&イツ フォーリーズ（ロック）
加藤町会長バンド （カントリーウエスタン）

表② 池袋懐メロステージ

応募があり、五歳から八十八歳まで幅広い年齢層の出場者が選考された。最年長の女性出場者（豊島区在住）による「岸壁の母」（二葉百合子）はまさに戦後を想起させるもので、朗々たる歌声が池袋のまちに響きわたった。優勝者は「聖母たちのララバイ」（岩崎宏美）を歌った小学四年生の男子。圧倒的な歌唱力で会場を沸かせた。昭和歌謡という制約が、歌による時代の継承とともに、むしろ一体感を演出する効果を上げ、（池袋（西口公園）―カラオケ―昭和歌謡）という要素の親和性の高さにも気づかされた。地元企業・商店等から多数の賞品提供を受け、出場者全員を表彰できる仕掛けをつくるなど、数多くのカラオケ大会を運営してきた実績をもつ唯野氏のプロデュースで大会は成功を

収め、池袋西口公園という〈場〉に新たな可能性を提示しえたといつてよい。

本イベント全体を通して、実行委員を中心に地元の有志や立教大学の総務課、教学連携課から人員の応援も得、概ね大過なく全日程を終えることができた。

現代の都市における「祭り」としてのにぎわいが担ったのは、単なる賑やかしのみにとどまらない。渡辺実行委員長が開会宣言でふれていたように、本イベントの根底にあったのは、平和への祈りである。老若男女が広場に集い、おいしい食べ物、飲み物を味わいながら、歌や音楽に身をゆだねる——そうした楽しさが叶うことへの感謝である。

そしてそれは、私たちが享受しているこの時間を、次の世代、未来にも継承せねばならぬという意志の表明でもあった。土地に宿る記憶をよりどころに過去を直視し、私たちが生きる現在を成立せしめている歴史や文化を捉えなおすこと、そこから未来を模索すること。それこそが——重言ながら——かつてヤミ市が存在した池袋西口公園という〈場〉で、戦後／ヤミ市を表象する諸要素をとり入れた本イベントを開催したこの本質的な意義に他ならない。

歴史を考えることは〈他者〉と出会うことである。戦後の記憶を〈自己〉として有する世代と、すでに歴史化（＝

他者化）されている世代が邂逅しえたのが、本イベントであり、本プロジェクトであった。戦後七十年という時間は、戦後池袋という歴史を〈自己／他者〉として捉える人びとが交差する地平でもあったのだ。

### おわりに

本イベントの終了後、各関係者から「来年はどうするか」「来年以降も続けてほしい」といった声が多く聞かれた。それ自体が本イベント、ひいては本プロジェクトの成功の証左でもあったとひとまずは言っていいたいだろう。

ただし、今回は「戦後七十年企画」という旗のもと、大衆としての教育研究的意義を一つの基盤に立ち上げた単年の限定企画だったため、本イベントの継続性やこれに類した取り組みへの立教大学の主体的な関わり等については今後の検討が望まれる。池袋西口公園で行われているイベント群と同様、単発に終わらない仕掛けを考え、連続性を担保することは可能なのか、どうか。本イベントの運営を通して地元から大学への期待の高さを改めて確認したが、その声を汲みとり、応える上で、大学内部の池袋西口公園に対する意識とのギャップ等を考慮に入れることなども大きな課題として残る。



とはいえ、これまで池袋西口公園での地域のイベント等に立教大学が主体となつて、関与することはなかったという声もあった。そうした点に鑑みれば、立教大学がつなぎ手として機能し、地域の持つ多彩なりソースを横断的に連結した本イベントは、大学が足場を置く地元に対してより積極的に自ら関わり、双方方向のコミュニケーションを構築していくための新手であつたともいえるかもしれない。

二〇一八年の池袋移転百年という節目を間近に控え、立教大学が地域とともにあるために、本プロジェクトが示した地域連携の一つの道筋をいかに次につなげていくか。その際、池袋西口公園という〈場〉の意味を改めて考える必要もある。キャンパスの飛び地として学園祭を展開してもいい。イベントの類だけでなく、足もとの社会連携教育の場——第二のキャンパス——として活用するという提案も有効だろう<sup>1</sup>。立教大学の学生が通学路として池袋西口公園を通り、日常的な愛着をもちうるような環境整備や関係づくりも望まれる。東京芸術劇場との連携も不可欠だ。

本イベントの運営による地域との協働を通して、池袋西口公園におけるイベント群は、池袋西口という地域自身が内発的な連携と発展を志向するための重要かつ不可欠な手段だったのではないか、そう思わされた。ヤミ市の時代か

ら、否、それ以前の学校が建ち並ぶ時代から、この空間はつねに大勢の人が集う〈場〉であつた。ヤミ市が撤去されて、やがて池袋西口公園ができたものの、当初は空き地が多く、薄暗い雰囲気だつたとも聞く。そうした状況を打開し、ふたたび人が行き交い、集まる場所にしようという願いが、池袋西口公園の再整備であり、ステージの設置であり、数多のイベントの創出だつたのだろう。今もなお、先行／現行世代によつて、池袋西口公園をめぐる議論が活発に行われている。池袋西口公園という〈場〉は、地域をめぐる知恵と思索の集積された空間でもあり、そこに向きあい続けることが、池袋（西口）を生きることなのかもしれない。

池袋の中に住む人だけでなく、外から来る人、通り過ぎていく人たちも共に集い、その環境を享受し、あるいは学ぶことのできる〈場〉を形成する。そのとき、立教大学が地域に果たす役割もまた新たに問われるのではないだろうか。

## 【注】

1 イベント等を通じた池袋のまちづくりや地域連携の歩みについては、齊木勝好「池袋のコミュニケーションと地域連携」池袋人

による池袋らしい「まちづくり」とは何か」（私家版、二〇一〇年）に詳述されている。また、二〇一二年七月十日に立教大学で開催されたシンポジウム「西池袋」を刺激する！ Part 2—豊島区制施行80周年で西口公園が変わる—（立教大学ESD研究所主催）の席上、高野之夫豊島区長は「豊島区では年間200を超えるイベントがありますが、とくに池袋西口がその中心を担っています。ひとつひとつのイベントは単独では一過性のもものかもしれませんが、それが連続性、さらに一貫性を持てるように展開させることで、意味をもつようにしたい。池袋に行くといえるも何かやっている、新し



い発見がある。それが、まちの魅力につながってほしい」（ESD Open シンポジウム報告書「西池袋」を刺激する！ Part 2—豊島区制施行80周年で西口公園が変わる—）立教大学ESD研究所、二〇一三年）と述べている。二〇一一年八月に池袋西口公園の利用法と運営について研究すべくNPO法人ゼファア池袋まちづくりのメンバーが「劇場広場研究会」を発足し、公園周辺の地元住民、商店、企業、大学、劇場、NPO等に所属する有志の参加を得て毎月定例で開催、池袋西口公園の運営に関する議論が深まった。そうした動きを背景に、前述のシンポジウムを契機として、立教大学も参画する「西池袋みどりのアートカフェ」（正式名称・豊島区立池袋西口公園の多目的活用に関する社会実験）が二〇一二年九月にはじまり、地域に根ざす複数の主体が連携して公園を運営する取り組みを展開、新たな企画も実施されている。一連の経緯と詳細は前掲シンポジウム報告書に収録された小林俊史「池袋西口公園における社会実験——西池袋みどりのアートカフェを中心に」を参照されたい。なお、二〇一六年四月、地元商店街・町会・企業・NPOからなる「池袋西口公園活用協議会」（<http://wgp-management.com>）が、豊島区と公民連携したパークマネジメントによって池袋西口公園という公共空間の新しい価値創造や運営をめざす取り組みをはじめたことも特記しておきたい。

2 出店者の募集段階では、当初見込んでいた店舗数が埋まらないという事態もあった。従来池袋西口公園のイベントに繁く参加していた坂下通り商店街の商店が近年相次いで閉店したことも少な

からず影響したようだが、商店街の現状という地域課題の一端が垣間見えた。これは本稿の任も筆者の力量も遥かにこえるが、地域に出ることでは、その地域の抱える先端的な課題は発見できないという学びでもあった。

3 注1 掲出のシンポジウムにおける西原廉太副総長(当時)のコメント(前掲報告書、二〇頁)を参照のこと。

〔付記〕 本イベントの実施にあたっては、本稿にお名前を挙げることでできなかった方々も含めてたくさんの皆様にご協力いただきました。本イベント、ひいては本プロジェクトに関わったすべての方々に感謝申し上げます。

(立教大学社会学部教育研究コーディネーター)